星耀綺譚－Dark Dawn－

liza

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星耀綺譚－Ｄａｒｋ　Ｄａｗｎ－

【Ｎコード】
Ｎ７１２４Ｓ

【作者名】
ｌｉｚａ

【あらすじ】
かつて、イスタリア大陸全土を絶望と混乱の渦に巻き込んだ、邪悪な女神『レラシム』が封印されてから３００年の時が経とうとしていた。堕天使レラシム、そして、彼女を封印した大天使ミシュカ、両者の壮絶な戦いは神話となって語り継がれ、現在も人々の心に深く刻まれている。その年、イスタリア大陸北東に位置する法国ノーザレアの小さな村『イースリッド』が何者かによって壊滅させられた。世界は再び迫り来る大いなる闇の訪れを予感していた。

プロローグ

”その聖なる光が及ぶところでは、よこしまな者たちは目を開けることすらできない。――ヘンリー・マーカス著、『聖なる夜』　”

―光の魂―

そこはただただ闇と静寂に包まれた空間だった。暗黒、そして音の無い世界が限りなく続く。いつからこの空間は存在するのだろうか。そもそも空間と呼べるような証拠さえ何もない、果てしない無の世界だった。

しかし、ある時ただ一点の光がそこに迷い込んできた。その光は果てしない闇の空間のごくわずかな部分を明るく照らしながら、流木のように暗黒の波を漂った。光はそこが空間であるという確かな証拠を示した。

一点の光は時々、感情を表すかのように大きな輝きを放った。そのたびに暗黒に満ちた世界が少しだけ明るくなった。

光が迷い込んで、どれだけの時が経ったのだろう。いや、時間という概念がここにはあるのだろうか。闇と静寂に包まれた何もない世界。時間の流れを感じさせるものは何も無い。果てしない無の空間。それでも光は誰かに呼びかけるように輝きを放ち続けた。

そして、それまで音が無かった空間に声が響いた。

「君が呼んでたんだね」

少年の声だった。光もその声に呼応するように大きく輝きを放ち、声の主は輝きに包まれて姿を現した。金色の髪をした少年だった。少年は波を漂うかのように、何もない空間に浮かんでいた。

「ずっと一人で寂しかったんだね。ぼくもずっと一人だったんだ。けど、君とこうして出会ったんだ」

少年が話しかけると、光は語りかけるようにまたたいた。そのたびに少年の金色の髪が美しく輝いた。

「君は大切なものを置き忘れてきたんだね。」

少年は光が伝えたいことを理解しているようだった。

「教えてよ。君が忘れ物をした場所を。ぼくが連れてってあげるよ。」

すると、光はそれまでにない輝きを見せた。喜びを表すかのように。

「友達になってくれたお礼だよ」

そう言うと、少年は両の手のひらを広げて、光に向かって差し出した。やがて、光はゆっくりと移動し、少年の手の中におさまった。

「行くよ。君の忘れ物を取りに」

まもなく、それまで深い闇の中に輝いていた一点の光は消え、後には、再び何も無い静寂と闇に満ちた世界が残されていた。

第1話　絶望の足音

“久遠の昔、七人の神々は恵み豊かな自然と生命溢れる世界を創った。神々は文明の発展を願って、人々に魔力の集約である七つの耀石を授けた。――七耀神話、第1節”

―絶望の足音―

星辰暦１０９２年、かつてイスタリア大陸全土を絶望と混乱の渦に巻き込んだ、邪悪な女神『レラシム』が封印されてから３００年の時が経とうとしていた。堕天使レラシム、そして、彼女を封印した大天使ミシュカ、両者の壮絶な戦いは神話となって語り継がれ、現在も多くの人々の心に深く刻まれている。

そして、同年、イスタリア大陸の北東に位置する法国ノーザレアの小さな村『イースリッド』が焼失した。民家は破壊され、村の全域が火の海と化す未曾有の大惨事だった。生存者は確認されず、約１０００人の村人は皆死亡したとみられている。最初は森林火災に村が巻き込まれたのではないかと思われていたが、数十棟の民家が破壊された形跡があることから巨大な魔獣の仕業とする意見も上がっている。ノーザレア教会は事態を重く受け止め原因の特定を急いでいる。

“真の絶望は突然やってくるものだ。足音すら立てずに……。その絶望の中でも私は最後まで戦い続けなくてはならない。村を守るため……、家族を守るため……。――クロイス・トリヴァ―”

イースリッド村はイースリッドの森を切り拓きつくられた、木こり達が暮らす村である。村の四方をうっそうとしたイースリッドの森に囲まれ、森を西へ抜けるとラフィス王国との国境の関所が見える。森には小型の肉食魔獣『ベイロス』が生息しているが、屈強な村人たちは危険なベイロスを斧によって狩り立て村を守っている。

そして、大難の日、イースリッド村ではいつもと変わらない一日が流れていた。太陽が昇り、村が木漏れ日で満たされる頃、木こり達は樹木の伐採を開始する。イースリッドの森では頑丈な木材として国内外で需要があるマヤの木が豊富に存在している。マヤの木は幹回りが5メートルにもなる巨木で、さらに材質が非常に堅く頑強なため、それを伐採する木こり達は並外れた腕力を持っている。

森には小鳥のさえずりが心地よく響き、恵み豊かなイースリッドの森を通り郁々たる香りを含んださわやかな風が吹いていた。森は平穏で満ち溢れ、誰もこれから起こる惨劇を知る者はいなかった。

太陽が頂点まで昇り、無数の木の葉が光を遮る薄暗いイースリッドの森の中でさえも木漏れ日で満たされる頃、その青年はいた。やや青に近い銀色の髪をして、彼の黒い瞳の奥には揺らぐことの意志の光が垣間見える。彼はしなやかではありながら、同時に勇壮な力強さを感じさせる身体をしていた。彼の手には刃渡りが4フィートもある大きな剣『クレイモア』が握られ、目の前の巨大なマヤの木に向き合っていた。作業員たちのほとんどが斧によって伐採をする中、クレイモアを握りしめるその青年の姿は一見風変わりだった。

この青年の名前はアンセル・トリヴァ―という。ノーザレア教会の軍である『月十字軍』に属していた父、クロイスと母、リースと共に5年前よりイースリッド村で暮らしている。

アンセルは深く息を吸ったあと、呼吸を止め目の前の巨大なマヤの木に向かって、クレイモアを振るった。その刹那、頭上の木々から漏れ出るかすかな光が、その大剣の刃に反射し閃光を放った。鋭い音がマヤの大木から聞こえた後、その太い木の幹にはその半分にも及ぶ深い切れ跡が刻まれていた。

まもなく、周りにいた村人たちがこれに気付いて、称賛の声が上がった。そして、一人の大柄な男が嬉々とした声色でアンセルに呼びかけた。

「アンセル！お前もかなり剣の腕をあげたな。クレイモアでマヤの木を切れるやつなんてそうはいないぞ」

「コートおじさんありがとう、でも父さんには全然及ばないよ」

アンセルはその大きな剣を鞘に収めながら言った。彼の銀色の髪が微かな日の光に照らされ白銀に輝いた。

「まあ、それはしょうがないさ。クロイスさんは8年前の『ニルアナ防衛戦』でかの英雄、オーランドの右腕としてガリア帝国軍を退けた人だからなあ。でも、アンセルの最近の成長ぶりはすごいよ。お前も月十字軍に入るんだろ？」

コートは巨大なマヤの木に刻まれた深い切れ跡をちらと見ながら言った。

「うん、俺も父さんみたいに国のために戦いたいんだ。だから、もっと修行して強くなろうと思ってる」

アンセルの瞳には純粋な正義の光が宿っていた。一切の穢れの無い純然たる光……。

「そうか、アンセル！俺も楽しみにしてるぞ！」

そう言うと、コートは作業場に戻っていった。そして、アンセルは再び、鍛練を開始した。

のちに起こる惨劇はこの光り輝く純粋な青年の心さえ黒く穢してしまうこととなる。

その頃、イースリッド村から西側のラフィス王国との国境に近い森の中を歩く二人の人影があった。

第2話　イースリッドの捕食者

“苦悶の劫火に身をゆだねなさい。絶望こそはわたしの源であり、さらなる絶望の炎を燃え上がらせるのよ。――紅蓮を操る者、ルージュ”

―イースリッドの捕食者―

「……それにしても、わたしたちの姿を誰にも見られちゃいけないなんて、ほんと無茶な注文よね」

深紅の長い髪をした女が煩わしそうな声で言った。彼女はまさに妖艶というものを体現したような風貌をしていた。その魅惑的な顔には、光さえも飲み込んでしまうような灰色の瞳があった。胸元には深紅の宝石のネックレスが耀いている。

「……仕方あるまい、盟主の命じだ。この任務には隠密性が要求される。我々の姿を見た者は消せばよかろう」

もう一人の漆黒の髪をした男が冷静な声で言った。彼もまた灰色の瞳をしていた。彼の表情からは冷徹さそのものが伝わってくる。頬には深い傷跡が斜めに刻まれ、彼の両腕には手首から肩にかけて黒い鎖が巻きついている。そして、右手の親指には藍色の宝玉がはめ込まれた指輪が耀いていた。

「でも、いくら盟主の命令だからって、あんなデカブツを連れ歩いてたら目立ちすぎるわよ。この森の中に入るまでに何十人殺したか……。動作テストだか何だか知らないけど、なんでわたしたちがそれの御守りをしなきゃいけないのよ。あいつらがやればいいじゃない」

赤い髪の女が彼女ら二人の後ろを指差しながら不満げに言った。そこには、不気味な機械音を立てて動く巨大な人型の影があった。それは薄暗いイースリッドの森の中でも目立つほどの漆黒の装甲、そして、高さ8メートルはあろうかという巨大な機械人形だった。この『黒き巨像』とも言うべき、漆黒の巨大な機械人形の四角い頭部には二つの小さな目が赤く不気味に光っている。その強固に覆われた漆黒の装甲の肩部には煙筒が設置され、真っ黒な煙を吐き出していた。

機械技術があまり発達していないイスタリア大陸において、この『黒き巨像』は極めて異質な存在だった。

「やつらは我々にとって有用だ。新参とは言えどもな。やつらは古代リスリア文明の技術を再現し、あの黒き巨像を蘇らせた。その点では盟主も高い評価を下している。黒き巨像はこれからの任務に役立つであろう。」

黒い髪の男が両腕に巻きついた黒い鎖を撫でながら言った。男が歩くたびに、その黒い鎖がジャラジャラと音を立てる。

「……別にわたしたちだけでも村一つ消すことなんて簡単よ。それにあの女……、いくら盟主に気に入られたからって、新参のくせに……」

「止まれ！」

鎖の男が制止した。

「何よ！いきなり……」

「周りを囲まれている。1、2……、8匹か。手荒い歓迎のようだ」

鎖の男が周囲の茂みを見渡しながら言った。彼はその冷徹な表情を一切崩さなかった。

周囲のうっそうとした茂みの中には、赤く光る眼がいくつもあった。それらはイースリッドの森に生息し、集団で狩りをする小型の魔獣、ベイロスだった。それは緑色の体色をしていることで、森の中で迷彩の役目を果たし、前足の鋭く大きな鉤爪で獲物に襲いかかる。

ベイロス達はじっと息を潜め、二人の獲物に飛びかからんとしていた。

「……確かにいるわね。あの子たちわたしたちを食べようだなんて思ってるのかしら？まあいいわ、仕事前のいいウォーミングアップになりそうね」

深紅の髪の女は周囲を見渡すと不敵な笑みを浮かべた……。

“ベイロスは狡猾な捕食者だ。やつらは集団で音を立てずに忍び寄り、その強靭な鉤爪で獲物を引き裂くのさ。――イースリッドの伐採者、コート”

それから少し時は流れ、太陽が西に沈みかけイースリッドの森の

中が真の闇に包まれる黄昏時、木こり達は作業を止めた後、村に帰ろうと森の中を進んでいた。村人たちが持つ松明の明かりに照らされ、森の木々が暗黒の中で不気味に浮かび上がっている。

すると、突然、列の最後尾から悲鳴にも似た声が静寂を破った。そして、一人の村人が声を荒げる。

「ベイロスだ！一人襲われた！」

突然の事態に木こり達全体に緊張が走った。彼らはすぐさま斧を構え、戦闘態勢に入る。イースリッドの森で伐採をするということは大いなる危険が付きまとう。餌に飢えた狡猾な捕食者ベイロスは常に獲物を探し求めているのだ。

「赤く光る目に注意するんだ！やつらはまたどこから襲ってくるか分からないぞ」

コートが大声で叫ぶ。木こり達が周囲を見渡すと、暗闇の中に赤く光る2つの目が無数に確認できた。

「これは数が多いぜ。だが、怯むな！俺たちの力をやつらに見せつけてやれ！」

一人の木こりが怒号を上げると、彼ら全体から大きな声が轟き、それらがときの声に変わった。

まもなく、ベイロス達は大きな唸り声を上げ、村人たちに襲いかかってきた。戦いが始まったのだ。

第3話　仄暗い戦場

“ミシュカの光は邪悪なる影を照らし出すだろう。ミシュカの祝福は我らに大いなる希望を与えるだろう。――ノーザレアの聖句”

―仄暗い戦場―

ベイロスの鋼のように強固な鉤爪と伐採者の剛性の高い斧の刃がぶつかり合う音がする。その鋭く大きな金属音が辺りのイースリッドの闇に響き渡っていた。

「やつらに後ろをとられるな！明かりを持つ者を囲んで、円の布陣をとるんだ！」

飛びかかるベイロスの鉤爪を斧ではじき返して、コートが大きな声を張り上げた。その声を聞いて、伐採者達はベイロス達に後ろをとられまいと円の陣形をとった。布陣の内側の伐採者が持つメラメラと燃え盛る松明が、漆黒の戦場に微光を灯している。

アンセル・トリヴァ―もその激戦の中にいた。彼の黒い瞳には、電光石火の如く動き回るベイロスの赤い目の残光が無数の線条を描いて映っていた。ベイロス達の鈍い唸り声がアンセルの聴覚を刺激する。その唸り声からアンセルは、ベイロス達が凄まじい怒りや悲しみに満ち溢れていることを感じた。

一匹のベイロスがアンセルに目掛けて襲いかかってきた。松明の

灯に照らされ、アンセルの瞳に映ったベイロスは、巨大なトカゲのようで、緑色のうろこ状の皮膚が奇怪な輝きを放っている。アンセルは鋭く尖った牙をむき出しにした憤怒の形相のベイロスに僅かな恐怖心を持たざるを得なかった。

（やつら、いつもと様子が違う……。怒り、そして、悲しみの叫び声が聞こえる。けど、落ち着くんだ！恐怖は、迷いに繋がる。一瞬の迷いは死へと直結する……）

それは父、クロイス・トリヴァ―の言葉だった。アンセルは父の言葉を思い出すことで、恐怖心を振り払い、冷静さを保った。

アンセルは正面から一直線に飛びかかるベイロスの頭部に狙いを定めて、大剣クレイモアを突き刺そうとした。その瞬間、ベイロスの恐ろしく強固な爪がクレイモアの切っ先に打ち当り、耳が割れるような金属音を放った。アンセルは大剣から伝わるひどく重たい衝撃で全身が震えるのを感じた。ベイロスはクレイモアの一撃で後方に数メートル跳ね飛ばされたものの、すぐに態勢を立て直し、次の攻撃を仕掛けようと赤い目をぎらつかせた。すぐさま、ベイロスは電光石火で駈け回り、アンセルの視覚を翻弄しながら、飛びかかり刃物のような前足を高速でふるってきた。

（速い……。避けられない……。）

そう悟ったアンセルは、クレイモアの分厚く平たい剣身を盾にして、ベイロスの鉤爪を受け止める。砲弾のように勢いに乗ったベイロスの全体重が彼の大剣の刀身にのしかかった。そのままバランスを崩したアンセルは、ベイロスを受け止めながら真後ろに倒れこんだ。獣はアンセルに覆いかぶさり、彼の両腕はその強靭な前足の刃により抑えつけられた。刃物のような鉤爪はゆっくりと彼の両腕を引き裂き鮮血を流した。アンセルの両腕に猛烈な激痛が走る。そし

て、彼は目の前の僅か３０センチ先に鋭く長い牙を剥き出しにし、今にも自分の頭部を噛み千切ろうとする、恐ろしいベイロスの表情を見た。睨みつけるベイロスの目はひどく充血していて、赤い目の奥底から計り知れない憤怒を彼は感じとった。

この絶体絶命の窮地において、アンセルは冷静さを失わなかった。すぐに、右利き足でベイロスの腹部をありったけの力を込めて蹴り上げた。すると、ベイロスは怯み、微かに表情を歪ませた。ベイロスのボディは堅いうろこ状の皮膚で覆われている。しかし、腹部は柔らかい皮膜で覆われていることを彼は知っていた。その刹那、アンセルの右腕が鉤爪の圧迫から解放された。アンセルの右腕にはナイフに切り裂かれたような深い傷ができ、多量の血がにじみ出し、激痛が走っていたが、動かすのには十分だと彼は思った。彼は懐から護身用の刃渡り２０センチほどの短刀をとりだし、ベイロスの胸部へと突き刺した。けたたましい咆哮と共に、獣はアンセルの上から飛び退いた。彼はすぐに起き上がり、クレイモアを再び構えて、弱り果て俊敏さを失ったベイロスを目で追った。

（動きがかなり鈍っている……。仕留めるなら今だ！両腕よ、持ってくれ……）

彼の傷ついた両腕はもはや限界にきていた。切り裂かれた深い傷跡から血が滴り、激痛が走っている。

弱ったベイロスが再び攻撃を仕掛けてきた。アンセルは神経を研ぎ澄まし、集中力を高めた。そして、彼は両腕に全神経を集中させてクレイモアを振るった。その刹那、重く鈍い音が周囲の空気を激しく振動させた。灯に照らされ地面に映るベイロスの影は二つに分かれた。クレイモアの剣筋はベイロスの胴体を真っ二つに切り裂いたのだ。絶命したベイロスの２つの残骸の断面から青色のおびただしい量の血が噴出する。それがシャワーのように降りかかり、アン

セルの全身を青色に染めていった。

ベイロスの残骸を見届けると、アンセルは全体を見渡した。伐採者達は極めて勇敢に戦っていたが、ベイロスの猛攻に押されているように思えた。彼は暗黒の中に光る赤い目が以前にも増していることに気付いた。負傷者は次々と増え、状勢は悪化していた。

まもなく、また別のベイロスがアンセルに飛びかかってきた。彼はクレイモアを構え、大剣を振るおうとする。しかし、そのときすでに彼の両腕には力が入らなかった。

アンセルは死を覚悟した。彼の内なる時間の流れがとまり、知覚する光景がとてつもなくスローになった。

「アンセル！まかせろ！」

アンセルは視野の端から怒声と共に高速で突進する大柄の人影を確認した。コートだった。コートは重厚な斧でアンセルに襲いかかる獣を切りつけ、弾き飛ばした。アンセルはスローモーションだった時間の流れが再び加速するのを感じた。

第４話　雷鳴の使者

“天空を司る神エメリアは、それまで闇に包まれていた世界に光が満ち溢れ、そこに暮らす住人が風景の美しさを感じ取れるよう、白金に輝く太陽を創造した。――七耀神話、第７節”

―雷鳴の使者―

「コートさん！」

アンセル・トリヴァ―は安堵の表情でコートを見やった。伐採者コートはすでに全身のありとあらゆる場所にベイロスによる切り傷を負っていた。

「アンセル、下がってな！お前はよくやった」

コートが勇ましく言った。コートの隆々とした腕がベイロスに追い打ちをかけようと鋼の斧を握りしめる。

「コートさんも傷だらけじゃないか！俺はまだやれるよ！最後まで戦いたい」

アンセルは腕に走る痛烈な痛みを堪えながら、必死に大剣クレイモアを構えようとする。

「こんなものはかすり傷さ……。俺はいつくたばってもいい。だが、お前には未来がある！月十字軍の守護騎士になって、ノーザレアを守るんだろ？」

コートはそう言うと、ベイロスとの激しい戦闘を再開した。コートの鋼の斧とベイロスの金属のように堅い爪がぶつかり合う音が甲高い金切り声を上げる。

アンセルは再び戦場を見渡した。伐採者達は皆、ベイロスの刃で切り裂かれながらも、決死の覚悟で戦っていた。しかし、この現状も長くは持たないだろう、とアンセルは思わざるを得なかった。ベイロス達の勢いはいっそう増すばかりだ。

「コートさん、俺は戦う。みんな命がけで戦ってるのに、ただ見ているだけなのは嫌なんだ！」

アンセルは大きく声を張り上げた。彼のやや青みがかった銀髪が松明の灯に照らされ耀きを放っている。彼は覚悟を決め、最後の力を振り絞ってクレイモアを握りしめた。そして、暗黒の中で赤い目をぎらつかせ、飛びまわるベイロスに大剣の一撃を加えるべく彼が走りだそうとしたその瞬間、雷鳴に似たような轟音が仄暗いイースリッドの闇の中に響き渡った。アンセルはそのとどろきが耳をつんざく中で、まるで稲妻が地面を沿うように、高速でジグザグに移動するまばゆい閃光を目撃した。その閃光は素早く飛びまわるベイロスを正確に捉え、雷鳴の如き轟音と共に致命傷を与えていった。ベイロス達の悲痛なうめき声が辺りにこだますると、今度は雷に打たれて肉が焦げたような臭いが立ち込めてきた。その閃光は十頭ほどのベイロスを一度になぎ倒すと、松明の灯に当てられゆっくりと正体を現した。紫の電流が刀身の表面を駈け巡りまばゆい光を放つ魔法剣を携え、年の頃は、四十半ばに見える壮年の剣士だった。彼の髪と蓄えられたあご髭は白銀に輝き、真に漆黒な瞳からは正義の灯

がほとばしっている。そして、多くの旅人が着るようなフードが付いた土色の外套に身を包んでいた。
その剣士は『稲妻の剣』で疾風迅雷に敵兵を撃破するその姿から『雷鳴の使者』と呼称され、８年前の『ニルアナ防衛戦』ではノーザレアの英雄と謳われた『オーランド・ヴォルト』の右腕としてガリア帝国軍の撃退に貢献した『クロイス・トリヴァー』、まさにその人だった。

「クロイスさん！！」

一斉にクロイスの方を見やった伐採者達が口々に嬉々とした声色で叫んだ。

「クロイスさんが帰ってきたぞ！もう大丈夫だ！戦況は変わった！このまま一気に片を付けるぞ！」

雷鳴の使者、クロイス・トリヴァーの参戦を受けて、伐採者たちの士気がまたたく間に上昇した。一方、ベイロス達はクロイスに仲間が次々と倒されていく状況を見て、それまで憤怒に燃えていた恐ろしい表情が怯える子犬のような表情に変わっていった。少数ながらもベイロスによる負傷を免れた伐採者達は、今が好機と言わんばかりに怯んだベイロスを各個撃破していった。さらに、クロイスが稲妻の剣によって５頭のベイロスを引き裂くと、残った少数のベイロスは勝ち目が無いと悟ったのか、蜘蛛の子を散らすように森の闇の中へ消えていった。

彼らは凶暴な魔獣の集団との戦いに勝利したのだ。伐採者達の大半はベイロスによる鋭い刃物で切り裂かれたようなひどい傷を負っていたが、幸いにも死亡者はいなかった。
彼らは勝どきを上げた。それは巨大な雄たけびとなり、イースリ

ッドの森全域に響き渡った。

伐採者達は窮地を救ったクロイスに駆け寄り、声をかけた。

「クロイスさんが来てくれなかったら俺たちはどうなってたことか……。でも、あんた、明日まで『法都ノーダム』に滞在するはずだったんじゃ？」

「ああ、私が出席していた議会は明日まで行われるが、今日で抜けてきたんだ。嫌な胸騒ぎがしてな……。先のベイロスのことであればいいんだが……」

クロイスは顔をしかめた。

「やっぱりクロイスさんだぜ！俺たちのことを心配してくれたんだな！」

一人の村人が嬉しそうに言った。

「クロイスさん、あんたのアンセルもよくやったよ。ベイロスを一刀両断したんだぜ」

コートはアンセルの方を指差した。

「父さん……、俺は……」

アンセルは、自分が最後まで戦えなかったことを心の中で悔やんでいた。彼がその旨を伝えようとしたその瞬間、クロイスは自身の言葉でそれを遮った。

「アンセル、何も言わなくていい。その腕を見ればお前が頑張った

ことくらいすぐ分かるさ。よくやったな」

そう言って父は我が子の頭を優しく撫でた。アンセルは目頭が熱くなり、今にも涙が溢れそうになるのをぐっとこらえた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7124s/

星耀綺譚－Dark Dawn－

2011年10月8日17時10分発行